

書評

篠原 尚, 水野恵文, 牧野尚彦 著

イラストレイテッド外科手術 第3版
膜の解剖からみた術式のポイント

慶應義塾大学教授・外科学

北 川 雄 光

私が、この『イラストレイテッド外科手術第3版』を手にしたのは、著者である篠原 尚先生が、私が執刀する胸腔鏡下食道癌根治術を見学に来てくださったちょうど一週間後の日本外科学会総会(第110回;2010年4月)の会期中であった。第3版で新たに加えられた食道癌根治術を読み進めていくうちに私は顔面蒼白となった。これほどまでに外科解剖を理解し、手術手技の細部に至るまで習熟している著者に対して、何という「釈迦に説法」のごときことをしてしまったことか。専門家ぶって蘊蓄を傾ける私に、優しい笑顔で「勉強になりました」とおっしゃった著者のお人柄が胸にしみた。

さて、食道癌根治術を安全かつ確実に行うためには、大血管や気道系、神経系が複雑に交錯する縦隔解剖の理解が必須である。時として術野では見えない部分の解剖を頭の中に描きながら手術を進め

なければならない。直接臓器を触知できない胸腔鏡下手術や、切除可能性が危ぶまれる化学放射線療法後のサルベージ手術の場合などは局所解剖の理解不足が重篤な臓器損傷に直結する。立体的な解剖をどう理解させるかは、食道癌根治術経験の少ない若手を指導する際には最も難しいところである。本書では、正常解剖を適切な角度から巧みに紹介した上で、必要な牽引、術野展開を加えた際の位置関係の変化を順次提示している。この手法が複雑な解剖を極めてわかりやすくしている大きな要因である。また、いつもながら最小限の描線で立体感、臨場感のあるイラストに仕上げる技術はまさに圧巻である。写実的なデッサンではなく明瞭なしかも一定のルールに基づいた線や点、色調の濃淡で立体解剖を巧みに描出する技術は驚愕に値する。

また、膜の解剖、層の解剖は生体を扱う外科医のみが到達しうる

究極の臨床解剖である。膜と層の正確な理解が、出血の少ない確実で安全な手術を可能にする。本書冒頭の胃をめぐる膜の解剖は、手術における基本戦略、応用力を養うために必須の知識でありながら、これを正確に理解習得することは容易でない。本書では、発生の学的知識を交えながら明瞭に簡潔化、模式化した図を用いてこれをひもといている。

本書は、第一線の外科医が一例一例を大切に、最も確実な手技を再現するために積み重ねた知識とイメージの集大成であり、記載された一挙手一投足から使用する手術器具に至るまでをそのまま再現することで、手術を完遂することができるたぐいまれな名著である。消化器外科をめざす研修医に贈りたい手術書としては、最適の一冊といえよう。今後さまざまな機器やシステムの変化によって外科手術がさらなる進歩を遂げ、それを取り入れた著者がさらなる洞察と経験を積むことで本書は版を重ねるごとに果てしなく進化していくことは間違いない。今から第4版に何が加わるのか、その登場が待ち遠しい。

[A4 頁 500 2010 年 定価
10,500 円(本体 10,000 円 + 税
5%) 医学書院刊]